

逆行推論について

井 島 正 博

はじめに

井島(二〇一〇・三)では、推量助動詞の疑問用法に関して論じている中で、ダロウのように、原因を理由とし結果を結論とする「順行推論」と、ラシイ・ヨウダ・ソウダおよびノダロウのように、結果を理由とし原因を結論とする「逆行推論」とでは、疑問のありかたが異なると論じた。本稿では、そのうち逆行推論についてさらに検討を加えたい。

1 問題提起

スウィーツァー(一九九〇)(以下に示すのはその澤田春美訳(二〇〇〇・一一))は、文法のさまざまな分野において、「内容領域 content domain」「認識領域 epistemic domain」「言語行為領域 speech-act domain」という三つの領域を設けることが有効である、という議論を展開しており、そのうち「接続」(日本語の確定条件節に相当)の章の冒頭で以下のように論じている。

はじめに、下の三つの文に見られる because の用法を比較してみ

よう。

[1] a John came back because he loved her.

(ジョンは、彼女を愛していたので帰って来た。)

b John loved her; because he came back.

(ジョンは彼女を愛していたのだ、というのは、彼は帰ってき
たからだ。)

c What are you doing tonight because there's a good movie on
(今夜何か予定ある。というのはい、いい映画をやっているか
ら。)

まず[1]aの場合、二つの節をつないでいるのは現実世界の因果関係である。すなわち、ジョンが帰ってきたことの現実世界の原因は、彼女に対する彼の愛である。一方、[1]bの場合、一見すると、因果関係が逆転しただけのように見えるかもしれない。しかし、実はそうではない。[1]bの解釈として、現実世界において、帰って来たから愛が芽生えたというのはやや不自然である。最も無理のない解釈をすれば、現実世界における因果関係はやはり[1]aにおけるようなものであろうが、そうでなければならぬということ

はない。[1]bの普通の意味は、ジョンが帰ってきたと話し手が知ったことが(前提となつて)ジョンは彼女が愛していたという結論が導き出されたということなのである。

一歩進んで、[1]cの場合、この接続を内容領域で解釈してしまうと、支離滅裂になってしまう。主節は主張ではない。それゆえ、このbecause節を、主節で述べられた事象・状況の現実世界的な原因を述べたものと解釈することはできない。そうではなく、このbecause節は主節が表している言語行為の原因を説明しているのである。解釈としては、「私はあなたに今夜の予定を尋ねるが、それは面白い映画を見に行こうと提案したいためなんだ」といったものである。

すなわち、[1]a・b・cはそれぞれ、内容領域・認識領域・言語行為領域で働くbecauseの用例であり、認識領域で働くbecauseは内容領域の「因果関係」を前提としており、(これより少し先で述べられているように)言語行為領域で働くbecauseは内容領域あるいは認識領域の「因果関係」(スウィーツァー(一九九〇)では、認識領域の推論の理由・結論関係も「因果関係」と呼ぶ)を前提としていると論じている。すなわち、内容領域は認識領域に埋め込まれ、認識領域は言語行為領域に埋め込まれていると了解される。ここで認識(行為)をE、言語行為をF(発語内の「力」の意)と表記すると、この三つの(広義の)「因果関係」は以下のように表現できる。

(F (E (p → q))) : 内容領域の「因果関係」

(F (P → E (q))) : 認識領域の「因果関係」
(P → F (E (q))) : 言語行為領域の「因果関係」

スウィーツァー(一九九〇)は、[1]a・bのbecause [1]cのbecauseは言語行為領域以外の解釈はできないが)は、最も典型的には以上のような解釈となるだろう。ここで注目したいのは、[1]aと[1]bとで主節と従属節(because節)との内容が逆転していることである。すなわち、内容領域で働くのを原因・結果関係、認識領域で働くのを理由・結論関係と呼べば、特に認識領域で働くbecauseを用いた文においては、原因・結果と、理由・結論とが逆向きになっているのである。ちなみに、ここでは言語行為領域の「因果関係」に関しては考察しない。言語行為領域の中に認識領域・内容領域が埋め込まれているのか、などの問題に関しては保留しておきたい。

さて、このような内容領域と認識領域との関係は、日本語ではどうなっているのだろうか。because節の議論をそのまま日本語にあてはめれば、従来から問題にされているノデとカラとの違いに関して、およそノデは内容領域で働き、カラは認識領域で働く、といった議論になりそうである(井島(一九九四・三)でもそれに近い議論をした。また、日本語には言語行為領域での「因果関係」を表わす形式は存在しないようである)。しかしここでは、推量助動詞の使い分けに関して検討したい(ちなみにスウィーツァー(一九九〇)でも、「モダリティ」という章はあるが、そこでは義務的モダリティ(deontic modality)から認識的モダリティ(epistemic modality)が派生したという議論が中

心になっている。

ここで、以下のような状況を考えてみたい。

(1) (冬になって、自宅で、急に寒くなったのを感じて)

a キャンパスの銀杏も色付いているだろう。

b *キャンパスの銀杏も色付いているようだ／らしい。

c *キャンパスの銀杏も色付いているのだろう。

この場合には、ダロウは自然であるが、ヨウダ・ラシイないしノダロウは不自然である。ここで、現実に見られる原因・結果の方向（「急に寒くなる」と「キャンパスの銀杏が色付く」と、推論における理由・結論の方向とが一致している。すなわち、原因を理由として、結果を結論とするような推論を行っている。このような推論を「順行推論」と呼ぶことにしたい。

他方で次のような状況も考えられる。

(2) (キャンパスの銀杏が急に色付いたのを見て)

a *急に寒くなっただろう。

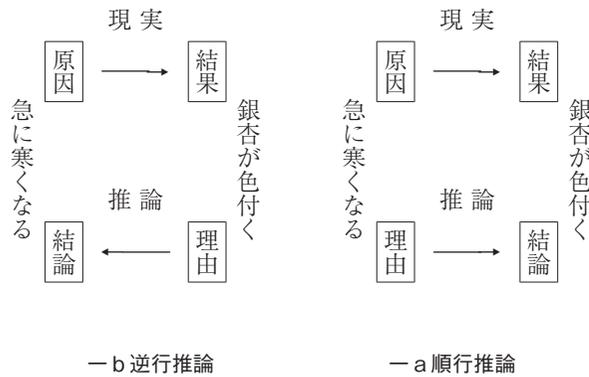
b 急に寒くなったようだ／らしい。

c 急に寒くなったのだろう。

この場合には、ヨウダ・ラシイおよびノダロウは自然であるが、ダロウは不自然である。ここでは現実の原因・結果の方向（先と同じく、「急に寒くなる」と「キャンパスの銀杏が色付く」と、推論における理由・結論の方向とが逆向きになる。すなわち結果を理由として、原因を結論とするような推論を行っている。このような推論を「逆行推論」

と呼ぶことにしたい。

このことを図示すると以下のように示すことができる。



以上のように、現代日本語においては、順行推論を表わすダロウは内容領域で働き、逆行推論を表わすヨウダ・ラシイ（・ソウダ）およびノダロウは認識領域で働く、ということになりそうである。

2 上代語のラシ

ちなみに、上代の推量助動詞ラシと中世後期以降現代まで続く推量

助動詞ラシイとは、中古から中世前期までの断絶の時期もあり、形は似ているが系統的には異なった助動詞であると言われる一方、意味的には、どちらも逆行推論に用いられることからも予想されるように、非常に近いものであるとも指摘される。とはいうものの、内容領域を越えた認識領域で働いていることを示唆する特徴が見出されるのは、上代語のラシである。

とはいえ、一方では条件関係が内容領域で働いて順行推論となっているように見える例 (H (E) (P → a)) も存在する。

(3) a 志賀の浦にいざりする海人明け来れば浦廻漕ぐらし (宇良未許

具良之) 楫の音聞こゆ

『万葉集』 卷十五・三六六四

b 秋萩の散り行く見ればおほほしみ妻恋すらし (妻恋為良思) さ

雄鹿鳴くも

卷十・二一五〇

しかしこれらは、条件節も含めてラシの推論内容を表わしており、その推論の根拠は別に示されていて、やはり逆行推論となっている。すなわち(3) aで説明すれば、内容領域では「明け来れば浦廻漕ぐ」[原因] → 「楫の音聞こゆ」となっているが、認識領域では「楫の音聞こゆ」[理由] → 「結論」[明け来れば浦廻漕ぐらし]と因果関係が逆行向になっている。

それに対して、条件節が認識領域で働いて逆行推論となっている例 (H (P → E) (b)) も以下のように少なからず見出される。

(4) a うちなびく春来るらし (春来良之) 山のまの遠き木末の咲き行

く見れば

『万葉集』 卷八・一四二二

b 秋萩は咲きぬべからし (可咲有良之) 我がやどの浅茅が花の散りぬる見れば

卷八・一五一四

c 里ゆ異に霜は置くらし (霜者置良之) 高松の野山司の色付く見れば

卷十・二二〇三

d 家人の使ひにあらし (家人使在之) 春雨の避くれど我を濡らさく思へば

卷九・一六九七

e 家の妹る我を思ふらし (和乎之乃布良之) 真結ひに結ひし紐の解くらく思へば

卷二十・四四二七

すなわち、(4) aで説明すれば、内容領域での原因・結果関係は、「春来る」[原因] → 「結果」[山のまの遠き木末の咲き行く]となる。それに対して、認識領域での理由・結論関係はその逆に「山のまの遠き木末の咲き行く見」[理由] → 「結論」[春来るらし]となる。ここで理由を表わす確定条件節が「く見れば」「く思へば」となっているのは、この条件関係が認識領域に属していることの証拠と見なすことができる。つまり厳密には、認識領域ではそのことを見たり思ったりしたことが、結論を導く理由となるはずだからである。

また、上代語のラシには、言うまでもなく、ベシが持つような連用形もないし、連用修飾用法は存在しない。連体形はないが、連体修飾をするものではなく終止用法である (『万葉集』の例(5) bは、破格ではあるがコソの結びに用いられている)。

(5) a 真蘇我よ蘇我の子らは馬ならば日向の駒太刀ならば呉の真鋤諾

しかも蘇我の子らを大君の使はすらしき (菟伽破須羅志积)

b 香具山は畝傍ををしと耳梨と相争ひき神代よりかくにあるらし古も然いしへにあれこそうつせみも妻を争ふらしき（相捨良思吉）

『万葉集』卷一・二三

ラシの用例は決して多くはないので、連体修飾をすることが本当に不可能であったのかは、用例がないからといって確言はできないが、上代のラシが内容領域でなく、認識領域に属していたとすれば、連体修飾はできなかったものと思われる。

このように、われわれが逆行推論と考えるイメージに最も合致するのは、上代語のラシの振る舞いである。

3 現代語のラシおよびヨウダ・ソウダ

それに対して現代語はどうであろうか。まず確定条件節をとることができかどうかを見てみると、まずほとんどのラシイ、およびヨウダ・ソウダが確定条件節をとることはない。ただ、辛うじて以下のような例を拾うことができる。まずラシイには以下のような例が見られる。

(6) a 二人は別に行く所もなかつたので、龍岡町たつおかちょうから池の端はたへ出て、

上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を総合そごうしてして考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引つ張出したらしいのです。

夏目漱石『こころ』469

b 奥さんの云うところを総合して考えて見ると、Kはこの最後の

打撃を、最も落付いた驚おどろきをもって迎ええたらしいのです。

夏目漱石『こころ』506

c 平中は独り寂しそうに、本院の侍従の局しほねに近い、人気のない廊下に佇たまたずんでいる。その廊下の欄にさした、油のような日の色を見ても、又今日は暑さが加わるらしい。芥川龍之介「好色」313

ヨウダにも以下のような例がある。

(7) a 葉子は勝手働きをしていると見え、今まで客座敷へは出ないようだった。川端康成『雪国』195

b 「だめですな。こんなに大きくなってしまつたら、産むより仕方ありませんよ。なぜもつと早く来なかつたんですか。前から解つていたでしょう。……お見かけしたところあなたがたは学生さんのようだし、結婚もしておいでにならんでしょう。……」石川達三『青春の蹉跌』371

c 小型のオートマティック・タイプのピストルだった。その古びかたからすると明らかにモデル・ガンではなく、本物の弾丸のである拳銃のようだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』665

また、ソウダにも以下のような例が見られる。

(8) a 「表面だけ見ると波ひとつなくて穏かそうだけれど、下の方ではすごい渦うずをまいてるのよ。……」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』400

b 「とんでもない。そんなことをしているひまはない。いまは最も

忙しい時期なのだ」「どうもきみの様子を見てみると、その最も忙

しい時期が一生涯つづいてしまいうさだな」

星新一『人民は弱し官吏は強し』160

c 次の目的地は瀨川山だったが、一時はれた霧がまた張り出して

視界を閉ざして動かないところを見ると、どうやら雨になりそう

だった。

新田次郎『孤高の人』752

しかしながら、これらはいずれも主節で推量される内容に対する理由が示されていると言っても、そう判断するに至ったきつかけ、あるいは推量が成立する条件が示されているに過ぎないようである。上代語に見られるような、推量内容に対する理由と言えるものは提示することはできないようである。

ただ、僅かの例ではあるが、確定条件を表わすノデ・カラが用いられた例が見出されることについて付言しておきたい。これらは、推論の理由をノデ・カラで示しているというよりは、次のように括弧で括って示されるような、原因・結果関係全体をヨウダ・連用形ソウダ・ラシイで推論しているものと考えられる。すなわち、(9) a 「暑いので、気が遠くなり」そうだ(9) b 「昨夜酔ったから、とろとろと眠っちゃった」らしいわ(9) c 「がくがくするほど震えるので、高橋夫人もそれに気がついた」らしい」のように内容領域で用いられていると考えられる (F) (E) (p ↓ (p))。

(9) a 若松町へ出て、また、わけもわからずに狭い路地の中を歩いてみる。腹がへって、どうにも歩けやしない、漠然とした考えにと

らわれる。第一、暑いので、気が遠くなりそうだ。

林芙美子『放浪記』914

b 「ねえ、帰れないわ。女中さんが火を入れに来て、みつともない、

驚いて飛び起きたら、もう障子に日があたってるんですもの。昨

夜酔ったから、とろとろと眠っちゃったらしいわ。」

川端康成『雪国』99

c 僕は開襟シャツの襟で眼鏡の玉を拭こうとしたが、ぶるぶる手が震えるのに気がついた。がくがくするほど震えるので、高橋夫人もそれに気がついたらしい。

井伏鱒二『黒い雨』95

次に見たいのは、ラシイおよびヨウダ・ソウダに連体用法や連用用法が見られるか、という点である。現代語のラシイ・ヨウダ・ソウダは、連体形および連用形も備えており、結論から言えば、連体用法および連用用法も決して珍しくはない。まずラシイの連体用法から見ていく。これらの用法は、眼前の状況からそのことが推測されることを表わしている。すなわち、(10) a は、「閲覧室で勉強をしていた」ので当該の「高校生」がそのような様子をしており(たとえば疲れた様子)、(10) c は、「大工が這入っている」のでその場で聞こえる「物音」がすると考えられることなどからすると、逆行推論を表わしているとして了解できる。

(10) a 閉館時間の六時が近づくと図書館の玄関からたくさんの人が出て来た。そのほとんどは閲覧室で勉強をしていたらしい高校生だった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1296

b そう言いながら、彼女はいかにも疲れを帯びたような、力なげな手つきで、ただ何んということもなしに手で弄もてあそんでいたらしいその帽子ぼうしを、すぐ脇わきにある鏡台の上へ無造作むぞうさくにほうり投げた。

堀辰雄「風立ちぬ」167

c あたりはひっそりとして人気がない。唯少ただし隔たった処から騒がしい物音がするばかりである。大工が這入はっているらしい物音である。外に板囲いいたかきのしてあるのを思い合せて、普請最中ふしんさいちゆうだなどと思う。

森鷗外「普請中」18

d そして世間と一切の交通を絶っているらしい主人しゅじんの許もとに、西洋の全部を保管しているNotarノタールの手で、利足りそくの大部分が西洋の某書肆しよしへ送られるのである。

森鷗外「妄想」105

e 五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い驚愕きょうがくに襲われて、呆然ぼうぜんと、周囲を見廻した。広庭の所々には、新しく打つたらしい杭の上に五斛納釜ごくのうかまを五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖あはを着た若い下司女げすが、何十人となく、そのまわりに動いている。

芥川龍之介「芋粥」86

連用形ラシクも珍しいものではない。これらも逆行推論を表わすと考えられる。すなわち、(11) aは「急に酔いが出た」ので「足がふらつく」のであり、(11) bは「生活にはゆとりがある」ので「常に身綺麗みぎれいな恰好かっこうをしている」のであり、以下も同様に解釈できる。

(11) a 鮎太は立ち上がったが、また腰を降ろした。山道を上ったので、

急に酔いが出たらしく、足もふらついていたが、それより躰全体がけだるかった。

井上靖『あすなる物語』242

b 左山町介の父は現役の海軍の将官だった。生活にはゆとりがあるらしく、常に身綺麗みぎれいな恰好かっこうをしており、生来の冷酷さと、良家の子弟としての、育ちのよさとも、傲慢ごうまんとも言えるものを、やはり一種の美貌びぼうと言つていいその色白の顔は持つていた。

井上靖『あるなる物語』267

c 部屋からロビーに降りると、思ったより若い、柔和な顔をした男が、フロントの前のソファに坐つていた。近寄ると、すぐ私とわかつたらしく、立ち上がつて手を差し伸べてきた。

沢木耕太郎『一瞬の夏』941

d 男は次に冷蔵庫を両手で持ちあげて、前に出し、それからドアの面が下側にくるように床に倒した。ラジエーターの近くの配線が断線したらしく、細かい火花が散つた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』517

e ヒラメは、自分に自殺のおそれありと、にらんでいるらしく、つまり、女の後を追つてまた海へ飛び込んだりする危険があると見てとつているらしく、自分の外出を固く禁じていたのでした。

太宰治『人間失格』133・134

f 向うに五月さんの姿が見えたから、太郎は手をあげたが、五月さんは仕事があるらしく、一向にこちらへやって来なかつた。店じまいまでにはまだ時間があるから、太郎たちは注文を聞きに来

た別のウエイトレスにそれぞれ、コーヒーやレモネードを頼んだ。

曾野綾子『太郎物語』459

g 「加藤君、どこか身体が悪いんじゃないか」外山三郎が声をかけてくれた。そのまゝに、田口みやが加藤の身体の異常を発見したらしく、医務室にいつて診て貰ったらどうかといった。誰も、加藤が極端な減食をしていることは知らなかった。

新田次郎『孤高の人』739

次にヨウダの連体用法は以下のようなものである。ヨウダは多くは比喩に用いられるが、比喩も見方を変えれば、逆行推論と解釈できる場合もある。すなわち、(12) a は、「幾ら停めようとしても、笑いが喉から勝手に飛び出して来る」のでそのような「笑い方」になるのであり、(12) b は、奥さんが「私の耳に私語」いているので「小さな声」になるのである。

(12) a ユーモラスな話が出ると、浜子は周囲に構わず笑ったが、その笑い方が、なぜか鮎太には異常に感じられた。幾ら停めようとしても、笑いが喉から勝手に飛び出して来るような笑い方で、そのくせ少しも笑いと云えるような明るいものではなかった。

井上靖『あすなる物語』293

b 奥さんは私の耳に私語くような小さな声で、「実は変死したんです」と云った。それは「どうして」と聞き返さずにはられない様な云い方であった。夏目漱石『こゝろ』94

c 母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつ

と返事があると母に保証した。然し父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかった。私は心得があって母を欺むいたと同じ結果に陥った。夏目漱石『こゝろ』232

d さぶはそろそろと振り向いて、栄二の顔を見た。好奇心からではなく、戸惑ったような眼つきであった。栄二はふきげんな、怒つてもいるような口ぶりで、自分が去年から幾たびか帳場の錢をぬすみ、それを主婦のお由にみつかったのだ、と告白した。

山本周五郎『さぶ』10

e 彼は眼にはいるすべてのものを憎み、それに挑みかかった。家並みを見れば、それがさもさも安穩な生活をたのしんでいるようにみえて憎悪し、往來する人の中に満ちたりたような、幸福そうな男女を見れば、心の中で嘲笑し呪詛をあげせかけた。

山本周五郎『さぶ』192

f 実際、ガブリエレ・トレヴィザンは、そこに彼がいるだけで周囲に安心感を与えるような肉体の持主であった。長年の海の上での生活が、もともと恵まれていた彼の肉体を鍛えぬいたのである。

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』46

さらにヨウダの連体用法も見えていく。ここにも逆行推論が働いていると考えられ、(13) a は、「暴風雨のときの話をしたい」から「帰りに寄れと、みれんがましく繰返していた」のであり、(13) c は「口の中に唾がなくなつた」から「あんまりおいしく」なかつたのである。

(13) a このあいだに、中年の番士が取次ぎにゆき、岡安がすぐに会う、

という返辞をもって戻った。老番士は^{なほ}莫をふかしながら、暴風雨のときの話をしたいようで、帰りに寄れと、みれんがましく繰返していた。

山本周五郎『さぶ』712

b 丘の上に建つ皇宮を守るように、このあたりの城壁は湾の岸から上にのびている。そこから皇宮をまわりきるまでは、一重の城壁だ。だが、幅は五メートルは優にあるようで、直立する城壁を外側から眺めると、堅固で威圧的な感じを与えた。

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』177

c もう今から食べ物をはかえても何にもなりません。せつかく出された御馳走ですから、私は鶏の丸焼きをみな食べました。でも何だか口の中に唾^{つば}がなくなつたようで、あんまりおいしくはありませんでした。爺さんは目を細くして私の体を眺めていました。

竹山道夫『ピルマの豎琴』297

d その女の子がカウンターのうしろのドアから姿を見せたのは十分か十五分あとのことだった。彼女は手に紙ばさみのようなものを持っていた。彼女は僕の顔を見て少し驚いたようで、頬^ほが一瞬赤くなつた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』134

e 老人は私が三つ食べるあいだにひとつつまむ程度だった。彼はキュウリが好きなので、パンをめくってキュウリの上に注意深く適量の食塩を振り、ぱりぱりという小さな音を立ててかじつた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』152

ソウダの連体用法の中にも辛うじて逆行推論と解釈できそうな例を拾うことができる。(14) aは、「雨にでもな」るのでそのような「空もよ」をしているのだし、(14) bは、「自動車はいまにも解体」すると思われるのでそのような「きしみをあげて」いるのである。

(14) a 栄二が立停ると、万吉は身を^{かが}踞めて向うをうかがつた。雨にでもなりそうな空もようで、星一つ見えない闇夜だったが、海の上には遠い、釣舟のものらしい灯が、淡い^{たい}橙色にまたたいていた。

山本周五郎『さぶ』274

b 町を出ると農学者は自動車に全速力を命じた。自動車はいまも解体しそうな^なきしみをあげて田畑や林をかすめ、山道をのぼり、高原を疾走した。

開高健『パニック』119

c 今にも降り出しそうな空を気にしいしい、信夫は吉川の家にもかつて歩いてきた。風がにわかにはびたりとやんで、家々の庭の草木も動かない。

三浦綾子『塩狩峠』136

d 太郎は初めての町を歩き出した。新開地、郊外、ベッド・タウン、何と呼ぶべきかわからないが、とにかく盛場からはずれた、新しい、陽^ひ当たりと排水^{はいすい}のよさそうな、風のよく吹き抜ける町だった。

曾野綾子『太郎物語』765

ソウダの連体用法には以下のようなものがあり、これらも逆行推論と解釈できる。(15) aは、「忙し」いので「食器の音を響かせていた」のであり、(15) bは、「彼等は睦^{むつ}まじ」いので「寄添って花の下を歩いてた」のである。

(15) a 春さんも清香も、たまの都会からの来客が嬉しいらしく、二人とも台所で絶えず喋りながら、忙しそうに食器の音を響かせていた。

井上靖『あすなる物語』236

b ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或時花時分に私は先生と一所に上野へ行つた。そうして其所で美しくしい一对の男女を見た。彼等は睦まじそうに寄添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりも其方を向いて眼を時だてている人が沢山あった。

夏目漱石『こゝろ』60

c さぶは包みを脇に置いて、恥ずかしそうに低くうなだれた。まもなくおのぶが来、注文をとおしてから、先に酒だけ持つて戻つた。そしていつものように飲み始めたのだが、さぶはすっかりふさいでしまい、例になく盃は重ねるが酔うようすはなく、少しも気持がはずまないで、二人はまもなくすみよしを出た。

山本周五郎『さぶ』65

d 「よく頑張ってるね」私が言うと、彼女は内藤の顔を見て、それから少し笑つて頷いた。やさしい笑顔だった。ふたりが並んでいると、しっかり者の女房とぐうたら亭主という絵柄の、典型のように映る。内藤にそう言うと、彼は不満そうに口を尖がらせた。

沢木耕太郎『一瞬の夏』254

e 扉を閉めた時、大戸の顔が眼に浮かんで来た。それは歯を喰いしりりながらパンチを振るっていた大戸の顔でもなければ、苦しそうに口元を歪めながらキャンパスに崩れ落ちていった大戸の顔

でもない。高崎のジムで、これでいいと思える試合ができるまでボクシングはやめられないと語っていた、悲哀に満ちた静かな顔だった。

沢木耕太郎『一瞬の夏』671

f 「お客様が怒鳴り込んで？」と伸子が訊いた。「ええ」受付の女の子は肯いて、「大変なんです。かみつかれそうで」「まるでブルドッグ」と純子が言った。

赤川次郎『女社長に乾杯!』128

以上、ラシイ・ヨウダ・ソウダの連体用法、連体用法には、逆行推論と解釈可能なものがあることを確認した。ただし、これらの連体用法、連体用法は、逆行推論をするのがその本質的な働きだと論じているわけではなく、そのように解釈できる例があることを指摘したにすぎない。

4 現代語のノダロウ

現代語において、ダロウは順行推論に用いられるのに対して、ノダロウはおよそ逆行推論に用いられるようである。その背後にはどのような論理が働いているのだろうか。

ここで、現実世界(内容領域)における以下のような因果関係を前提として議論を進めたい。「関東地方を前線が通過する」**原因**↓**結果**「雨が降る」**原因**↓**結果**「庭が濡れる」

まず、原因・理由が明示されることなく、結論のみが示される場合には、逆行推論の場合のみが自然である。

(16) (天気予報で関東地方を前線が通過したことを知って我が家のことに思いを馳せて)

a *雨が降ったのだらう。

a' cf 雨が降っただらう。

(庭が濡れているのを見て)

b 雨が降ったのだらう。

このことはどのように説明できるだろうか。まず、原因・理由のある条件文から条件節が省略されて(16) bの文が成立した可能性がある。しかし、原因・理由を明示化すると、順行推論の場合は自然であるが、逆行推論の場合は不自然となるというように、一見全く逆の結果を得ることになる。

(17) a 関東地方を前線が通過したので雨が降ったのだらう。

b *庭が濡れているので雨が降ったのだらう。

このように、順行推論の場合、因果関係全体(関東地方を前線が通過したので雨が降った)がノダロウの推論内容であると考えれば、(18) aは、むしろ条件節(「関東地方を前線が通過したので」)を焦点とすするためにノダロウが用いられたと了解することができる。それに対して、(18) bは、ラシイ・ヨウダ・ソウダなどと同様に、推論内容に対してその理由を示すのは不自然であるという説明ができることになる。

(18) a 「関東地方を前線が通過したので雨が降った」のだらう。

() は焦点

b *庭が濡れているので「雨が降った」のだらう。

要するに、(16) a・b、(17) a・bを比べると、逆行推論をするノダロウは、原因・理由を表わす確定条件節が省略されたものであると考え

ることはできないということである。それでは、逆行推論を表わすノダロウ文はどのように成立したと考えることができるだろうか。

そこで考えられるのが分裂文である。(16) a・bの文を、PノハQノダロウという分裂文の主語で表わされた前提部分Pが省略されたものだと考えると、もとの分裂文は(19) a・bのようになるが、この場合も(16) a・bと同様に、(19) aは不自然であるが(19) bは自然となる。

(19) a *関東地方を前線が通過したのは雨が降ったのだらう。

b 庭が濡れているのは雨が降ったのだらう。

このことは、分裂文をもとの形にした(20) a・bを考えてみると、因果関係に則った(20) bは自然であるのに対して、それに逆行する(20) aは不自然である。それが分裂文である(19) a・bの自然さに、ひいては(16) a・bの自然さに受け継がれているものと思われる。

(20) a *雨が降ったので関東地方を前線が通過した()のだらう。

b 雨が降ったので庭が濡れている()のだらう。

ここで実例でも以上のような議論が支持されるか検討してみたい。まず、ノダロウで結ばれた文に、確定条件節が含まれている場合があるが、これはいずれも順行推論を表わしている。ただしこの場合は、原因・結果関係全体をノダロウによって推量していると考えられる。面白いことに、(21) dのように二文になっていても、ノダロウの文が「だから」によって前文と結びつけられていると、前文と順行推論の関係を作るようである。

(21) a おもうちに、ここに通って来ていればともかく相当な収入を約束

する技術があり、派手らしい雰囲気があり、舶来の嗜好品などもあり、ときに若い男たちがいつも出入りして、映画とかシナそばぐらいにはよくさそってくれるし、たまにはもつとほかの場所にも泊まりがけでさそってくれようという特典があるので、そういう実用的な、勝負のはい誘惑からはなかなか離れがたいのだろう。

石川淳「処女懐胎」430

b ところで、奇妙なことに、伝吉が銀行にも預けずにしまいこんでいたれの何十万円は、たしかに敵が狙いをつけて来たにちがいないのに、これはそっくり無事であった。というのは、その札束を押しこんであるリュック・サックが、ベッドの枕もとの床の隅に、ちようと紙屑籠かみくずかごとならべて抛り出してあったので、敵は心いそいだために、つい見おとってしまったのだろう。

石川淳「処女懐胎」513

c 天守閣は何千トンの重さがあつたか知れないが、地球の引力よりも強い力で動かされたので、そのままの姿で空中を飛んだのだから。

井伏鱒二「黒い雨」337

d 岩竹さんのいた兵営は爆心地に近いところにあつた関係で、たまたま茸雲を真下から見るとりながら逃げたのではありません。かつたらうか。だから「曇つた空」と簡単に書いているのだろう。

井伏鱒二「黒い雨」541

これは、ノダ(ロウ)は、「太郎が来たのだから」「目的地に着いたのだから」のように、文中の何らかの要素に焦点を置くために用いら

れることがあるが、それが条件節であることもあるということなのだろう。

それに対して、因果関係で結ばれた二つの文の後の文にノダロウが付いている場合、後の文が原因、前の文が結果となり、逆行推論を表わすことになる。たとえば(22)aの原因―結果の関係は、「脆く砕け飛ぶ際に光るのが面白い」[原因]↓[結果]「子供の群が溝の水を抱き起して来ては、道に投げて遊んでいた」となるが、直接目撃されたのは結果の方であり、それをもとに原因が推論されたのである。

(22) a 子供の群が溝の水を抱き起して来ては、道に投げて遊んでいた。

脆く砕け飛ぶ際に光るのが面白いのだろう。 川端康成「雪国」75

b 向うの座敷のさわきも、だいぶ下火になって来た。宴会はそろそろ引けぎわなのだろう。

石川淳「かよい小町」318

c そのとき、駅前にとよめきがおこつて、赤旗の列がうごいた。また電車がついて、改札口から出て来た一かたまりがある。代議士が来たのだから。

石川淳「かよい小町」366

d その翌日の午後、重松は孵化池の様子を見に行った。毛子の生育は上々で、大きい方の養魚場の浅くなっている片隅に蓴菜しゆんさいが植えてあつた。たぶん庄吉さんが城山の弁天池から採って来て植えたのだろう。

井伏鱒二「黒い雨」669

ちなみに、まれにPノハQノダロウという名詞述語文の形も見られるが、この場合も逆行推論になっている。

(23) a 本堂の甍むかの上に大むかしの貴顕の家の金紋を三つ打つたのが、

黒ずむまでにさびながら、矢倉のように載っているのは、宗旨は天台か何か、さだめて由緒のある寺なのだろう。

石川淳「変化雑載」566

b 僕がぼんやりして縁側に立っている間に、背後の座敷には燭台が運ばれた。まだ電燈のない時代で、瓦斯も寺島村には引いてなかったが、わざわざランプを廃めて蝋燭にしたのは、今宵の特別な趣向であったのだろう。

森鷗外「百物語」139

要するに、ノダロウは、文中に確定条件節を含む場合は(㉒)(㉓)(㉔)(㉕)(㉖)(P↓Q)ノダロウ)という構造を取り、順行推論となる。しかしノダロウ文が前の文と原因・結果の関係を持つ場合、あるいは分裂文となる場合には、ヨウダ・ソウダ・ラシイと同じく、逆行推論となることがわかった。

ちなみに、ノダロウは、ダロウが真正モダリティであると言われるように、連体修飾をすることは極めて稀で、ましてや連用修飾することはない。

5 現代語のラシイおよびヨウダ・ソウダの位置付け

最後に、それでは現代語のラシイおよびヨウダ・ソウダはどのような位置付けができるのか、考えてみたい。まず、上代語のラシイと現代語のラシイ・ヨウダ・ソウダは、いずれも逆行推論をするという点では共通性を持っていた。しかるに、確定条件節をとるかどうかが、連体用法・連用用法があるかどうかという点に関しては、ことごとく

反対の結果となり、そのうち上代語のラシイの特徴の方が、認識領域に位置するのにふさわしいと考えられた。

	確定条件節をとる	連体用法がある	連用用法がある
上代語のラシイ	○	×	×
現代語のラシイなど	×	○	○

図表二

それでは現代語のラシイ・ヨウダ・ソウダの位置付けはどのように考えればよいのだろうか。

(24) a (試合に勝てば花火を上げるとあらかじめ聞いていたが、花火が上がったのを聞いて)

うちのチームが勝った「んだ／らしい」。

b (夕方、バスの赤いテイルランプを見て)

最終バスだった「んだ／ようだ」。

これらはグライスの言う「非自然的意味」の場合である。すなわち「うちのチームが勝てば花火を上げる」、「最終バスであれば赤い明かりをとます」といった、人為的な約束事をもとにして、「花火が上がった」のを聞いて「うちのチームが勝った」ことを知り(推論し)、「テイルランプが赤くともっている」を見て「最終バスである」ことを知る(推論する)ことを表わしている。これを本稿の議論に即せば、いずれも逆行推論にあたる。言語を介したコミュニケーションが、原則的に「非自然的意味」をもとに行われるものであるとすれば、逆行推論は

コミュニケーションの本質に位置付けられることになる。

これと同様に、人為的に結びつけられた関係でなくとも、同様の特徴を有する。

(25) a (黒い雲が空に広がるのを見て)

雨が降りそうだ。

b (夕方、友人の部屋に明かりがともるのを見て)

帰って来たみたいだ。

これらの表現は、改めてその仕組みを考えると、確かに因果関係を逆に辿った推論である場合が多いが、日常生活では現象とその意味とが記号のように結び付いており、あえて心内で推論をすることはないように思われる。

そうであるとなると、現代語のラシイ・ヨウダ・ソウダに理由節が加わることは不自然であり、また他の状態述語と同じように連体修飾や連用修飾も可能となるのであろう。とすると、スウィーツァー(一九九〇)の枠組を用いると、現代語のラシイ・ヨウダ・ソウダはむしろ内容領域で用いられる助動詞であり、それに対して上代語のラシは認識領域で用いられる助動詞であると位置付けられそうである。

従来、ラシイ・ヨウダ・ソウダは、何らかの徴候や証拠をもとにした推論である(「徴候性推論」ないし「証拠性推論」であると論じられてきた(寺村(一九八四・九)、仁田(一九九一・六)、益岡(一九九一・五)など)。結局、本稿も同様の結論にたどり着いたように思われるが、それを推論の方向から見直してみた、ということになる。

おわりに

従来、上代語のラシと現代語のラシイとは、系統的に連続したものではないが、意味的には非常に近いと言われてきた。確かに推論の方向という点では、どちらも逆行推論をするという点で共通性がある。

しかしながら、ここにスウィーツァー(一九九〇)の文法の三領域の観点を導入すると、逆行推論が位置すると思われる認識領域で働いていると思われるのは、上代語のラシの方である。すなわち、確定条件節と共起するか、連体修飾が可能か、連用修飾が可能か、という基準を立てれば、上代語のラシは、確定条件節と共起し、連体修飾用法も連用修飾用法も持たない。それに対して現代語のラシイおよびヨウダ・ソウダは、原則として確定条件節と共起することはなく(確定条件節を含んだ全体を推量することはできる)、連体修飾用法も連用修飾用法も持っている。これはたとえば現実の花を見て「美しい」と言うのと同じく、推論を経ることなく現実を描写するために用いられている、いわば内容世界で働いていると考えられる。眼前の花を見て、「野に咲いているから、美しい」のように確定条件節を用いることもないし、「美しい花」のような連体修飾用法も、「美しく咲く」のような連用修飾用法も持っている。

一方、ノダロウの場合は、むしろ分裂文の前提を表わす主語が省略されたものであるために、逆行推論を担っていると考えられ、実例を見ても、分裂文になったもの、直前の文を前提としたものなどが見出

される。

資料 万葉集・古典文学全集、近現代小説・新潮文庫の一〇〇冊

参考文献

- Eve E. Sweetser (一九九〇) "From Etymology to Pragmatics : Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure" Cambridge University Press
(澤田春美訳『認知意味論の展開——語源学から語用論まで——』
(二〇〇〇・一一) 研究社出版)
- 寺村 秀夫(一九八四・九)『日本語のシNTAXと意味Ⅱ』くろしお出版
- 益岡 隆志(一九九一・五)『モダリティの文法』くろしお出版
- 仁田 義雄(一九九一・六)『現代日本語の人称とモダリティ』ひつじ書房
- 井島 正博(一九九四・三)「推量文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』第29号 pp29-93
- 井島 正博(二〇一〇・三)「上代・中古語推量助動詞の疑問用法」『東京女子大学日本文学』第百六号 pp23-53

付記 本稿は、二〇一七年一月一四日(土)に、ソウル女子大学大学路キャンパスで行った、グローバルヒューマンネットワーク研究会学術発表会の講演の内容に若干手を加えたものである。